

日本のヒマラヤ登山最盛期

尾 形 好 雄（日本ヒマラヤ協会顧問）

東京オリンピックが開催された1964年に日本人の海外渡航が自由化されると、海外の山々に憧れていた日本のクライマー達は、堰を切ったようにアルプスやヒマラヤへと飛び出して行った。

ところが皮肉なことに65年3月、ネパール政府は、突然、ネパール・ヒマラヤの登山禁止を発表し、門戸が閉ざされてしまう。登山禁止措置は4年半に及び、69年秋から再解禁された。

70年春から満を持した登山隊がネパール・ヒマラヤに殺到し、第2次ヒマラヤン・ブームが起こる。

筆者もこのヒマラヤン・ブームのさなか、自分の所属する山岳会の仲間とヒマラヤへ行ってみようと計画し始めたのが71年であった。

74年にヒマラヤ初見参してから、最後の8,000m峰登山となった97年までの24年間に17回ほどヒマラヤに出かけた。本稿では筆者がヒマラヤ登山に関わった時代の日本のヒマラヤ登山について述べる。

文中の登山隊の（ ）内は、隊長名、HAJ は日本ヒマラヤ協会、JAC は日本山岳会、IMF はインド登山財団の略称。

ヒマラヤ鉄の時代

1970年の第2次ヒマラヤン・ブームの到来と共に登山界で叫ばれたのは、「ヒマラヤ鉄の時代」であった。既に8,000mの未踏峰は無く、巨峰のヴァリエーション・ルートを目指す時代となった。

70年、イギリス隊（C.ボニントン）のアンナプルナI峰南壁、西ドイツ・イタリア隊（K.M.ヘルリヒコッファー）のナンガ・パルバット南南東側稜、

71年、フランス隊（R.パラゴ）のマカルー西稜、72年、オーストリア隊（W.ナイルツ）のマナスル南西壁、75年、イギリス隊（C.ボニントン）のエベレスト南西壁などが華々しく初登攀され、「ヒマラヤ鉄の時代」の幕開けとなる。

こうした風潮を受けて日本隊も8,000m峰のヴァリエーション・ルートに挑戦した。

70年春、JAC隊（松方三郎）がエベレスト南西壁に挑むも断念、南東稜から日本人初登頂。同時期、JAC東海支部隊（原真）は、マカルー南東稜を初登攀。

71年には日本マナスル西壁登攀隊（高橋照）がマナスル北西支稜を初登攀。73年秋には日本の精鋭クライマーを集めた第2次RCC隊（湯浅道男）がエベレスト南西壁に挑むも8,380m迄で涙を飲み、南東稜からの秋季初登頂にとどまる。

ダウラギリI峰では78年春と秋に2つの初登攀が成された。春季に東京都山岳連盟隊（雨宮節）が南稜、秋季には群馬県山岳連盟隊（田中成幸）が南東稜をそれぞれ初登攀する。

81年、早稲田大学隊（松浦輝夫）がK2西稜～南南西稜上部。同年秋にイエティ同人隊（吉野寛）がアンナプルナI峰南壁。82年、日本山岳協会隊（新貝勲）がチョゴリ（K2）北稜。同年秋にカモシカ同人隊（佐々木徳雄）がダウラギリI峰の難攻不落を誇った北西稜をそれぞれ初登攀する。

86年、登歩渓流会隊（清水修）がガッシャーブルムI峰北クーロワール。90年、横浜山岳協会隊（岸本五三男）がチョゴリ（K2）北西壁下部。同年夏、

3. 海外登山記録

岡山大学隊（黒田治久）がガッシャーブルムⅠ峰西稜末端からそれぞれ初登攀する。

95年春、日本大学隊（神崎忠男）がエベレスト東北東稜～北東稜を完登。同時期、JAC隊（重廣恒夫）がマカルー東稜。同年夏、千葉工業大学隊（坂井広志）はナンガ・パルバット北面ラキオト側稜を初登攀。

97年、JAC東海支部隊（田辺治）がK2西稜～西壁初登攀などの記録を残した。

短期速攻、無酸素、単独

1975年夏、ライホルト・メスナーとペーター・ハーベラーの二人がガッシャーブルムⅠ峰を「高所ポーターも固定ロープも酸素も使わずに一撃で登頂した。」と云う衝撃的なニュースが流れた。また、同年秋には英国のディック・レンショーとジョー・タスカーの二人がガルワールのドゥナギリ南東壁を6日間のアルパイン・スタイルで初登攀。このように8,000mの高峰と7,000m峰の困難な壁が一撃で登られ、ヒマラヤにおけるアルパイン・スタイルの到来を迎える。

76年、原真はJAC隊を組織して、当時ソ連がパミールで開催していた「国際キャンプ」に参加してソ連滞在35日間の日程でイスモイル・ソモニ（コムニズム）とコルジェネフスカヤを目指した。原はこの登山を皮切りに高所での実験登山を繰り返し、アルパイン・スタイルの登山を牽引した。

パミールの国際キャンプは、短期間で複数の7,000m峰登山ができるため毎年多くの日本人が訪れた。さらに89年にハン・テングリ（6,995m）が7,010m峰として解禁されると天山国際キャンプも人気を博した。

82年、原真は高山研究所隊を率いてシシャパンマ中央峰を北東稜からアルパイン・スタイルで登り、日本人として初めて8,000m峰のアルパイン・スタイ

ル登山を成し遂げる。89年には高山研究所隊（原真）の遠藤晴行・由加夫妻がアルパイン・スタイルでガッシャーブルムⅠ峰に登頂。

94年秋、長尾妙子・遠藤由加ペアがチョー・オユー南西壁をアルパイン・スタイルで登頂。2人に同行した山野井泰史は南西壁新ルートを単独初登攀。

一方、78年になると日本出発から帰国まで1ヶ月で7,000m峰登山が行われるようになる。78夏、HAJ隊（沖允人）は、カシミールのヌンを31日間、同年秋のHAJ隊（稲田定重）は、ガルワールのトリスルを27日間で登頂して帰国した。

また、78年秋には清水清二・加藤保男ペア（ドクターがBCに同行）でマナスルを目指すような少人数登山隊も現れた。

78年春、ライホルト・メスナーとペーター・ハーベラーの二人が今度はエベレストの無酸素登頂を果たす。人類が世界最高峰を自分の肺呼吸だけで登った記念すべき出来事であった。メスナーは、80年夏にチョモランマの北稜～グレート・クーロワールの単独無酸素初登攀という究極のソロ・クライミングを成し遂げる。

日本人の超高峰の無酸素登山は、小西政継が牽引し、世界三大高峰の無酸素登山に挑戦した。80年、山学同志会隊（小西政継）がカンチェンジュンガ北西壁から無酸素初登攀。82年、チョゴリ（K2）北稜の無酸素初登攀（ヒマラヤ鉄の時代で既述）。82年秋、山学同志会隊（湯田一男）がマカルーの無酸素登頂。83年秋、イエティ同人隊（吉野寛）と山学同志会隊（川村晴一）がエベレストの無酸素登頂。これで川村晴一は、世界三大高峰の無酸素登頂者となる。

禿博信は、81年にダウラギリⅠ峰を単独無酸素登頂（北東コル迄はシェルパが同行）した後、82年にチョゴリ（K2）、83年にはエベレストの無酸素登頂を達成するが、エベレスト頂上からの帰途、墜死する。

山田昇は、85年夏にHAJ隊でK2、秋に植村直己物語隊でエベレスト、冬にはマナスルと3季連続無酸素登頂のハットトリックを達成。山田は、88年にも春にエベレスト縦走、秋にシシャパンマ、チョー・オユーの2度目のハットトリックを成している。

96年、戸高雅史がK2を単独無酸素登頂。2000年、山野井泰史はK2の南南東リブから単独無酸素初登攀を成す。

ヒマラヤ縦走

1971年、東京大学隊（高橋詢）は、チューレン・ヒマールの西峰～東峰の縦走を試みるが、力及ばず。その後、同隊で登攀隊長を務めた鹿野勝彦は76年にJAC隊を率いてナンダ・デビィ東峰～主峰の縦走を果たす。さらに84年にカンチェンジュンガ南峰～中央峰の縦走と主峰登頂を成功させる。

76年、芝浦工業大学隊（秋山和也）は、バルトロ・カンリのⅣ峰から最高峰のⅢ峰を越えてⅡ峰からⅠ峰へ縦走し、Ⅱ峰、Ⅰ峰の初登頂を果たし、往路を戻った。同年秋、東京都勤労者山岳連盟隊（近藤和美）は、ガルワール・ヒマラヤのマイクトリとデヴィトリの交差縦走を目指し、デヴィトリ側の3名がマイクトリへの縦走を成功させた。

77年、茨城大学隊（平井広二）は、ヒンドゥー・クシュのウドレン・ゾムの南峰～中央峰を縦走。

79年、法政大学Ⅱ部山岳部OB会隊（土居正勝）は、ルプガール・サールの西峰～中央峰の縦走に成功。

同年秋、カモシカ同人隊（今井通子隊長）は、ダウラギリⅡ峰～Ⅲ峰～Ⅴ峰の初縦走を成した。

81年春、HAJ隊（山森欣一）は、カンチェンジュンガ主峰～ヤルン・カン（西峰）の交差縦走を目指したが、ヤルン・カン側の登頂時間が遅れたため、交差縦走は断念。

88年、エベレストの北面と南面からの交差縦走が日本・中国・ネパールの三国合同隊によって成された。

95年、戸高雅史、北村俊之、服部徹の3名はブロード・ピーク北稜から北峰～中央峰～主峰への縦走を成す。

岩壁登山

一方、この時代はヒマラヤの困難な岩壁も登られた。1971年に当時日本を代表するクライマーの一人と云われた古川正博（清水RCC）を擁した静岡登攀クラブ隊（秋山礼佑）がヒンドゥー・クシュのサラグラール南西Ⅱ峰西壁を初登攀し、これが日本の7,000m峰に於ける岩壁登山の嚆矢とされている。

76年、後にフリークライミング界をリードする戸田直樹はグループ・ド・コルデの仲間を率いてチャンガバンの南西稜を初登攀。同年春、山学同志会隊（小西政継）は、ジャヌー北壁～東稜を初登攀する。

78年、静岡登攀クラブ隊（勝美幸雄）は、バインダー・ブラック南壁を初登攀。79年、ピアフォ・カラコルム登攀隊（高田直樹）がラトックⅠ峰南壁から初登頂。同年、広島山の会隊（寺西洋治）はラトックⅢ峰南東壁から初登頂する。80年、東京大学隊（安田典夫）がシヴリン北稜～北壁。81年、近藤国彦・名越實ペアがクン西壁。83年、婆娑羅衆隊（大浜健次）がシヴリン南稜をそれぞれ初登攀。84年、東京大学隊（永田東一郎）がK7を南西稜から初登頂。87年、バルトロ・キャンプ隊（野中玲樹）がファースト・トランゴを初登攀。88年、バルトロ・クライミング・チーム隊（丸藤正晴）は、トランゴ・ネームレス・タワー南東壁に挑み、ピーク迄150mの地点で断念。

山学同志会の市山篤らは88年、90年とケダルナート・ドーム東壁に挑むも完登は叶わなかった。

3. 海外登山記録

90年、日本隊（南裏健康）がグレート・トランゴ北東ピラーとトランゴ・ネームレス・タワー東壁及び南西壁の登攀に成功。94年、日本バギラティ登山隊（山本一夫）がバギラティⅡ峰南西ピラーを初登攀。95年、山野井泰史・妙子夫妻と中垣大作は、レディース・フィンガー南西壁初登攀。96年にメルー北東壁のシャークスフィンに挑戦した馬目弘仁は、其の後も01年、04年、06年と挑戦し続け、最後は01年に登られたババノフ・ルートから中央峰に登頂。

初登頂、女性登山隊

第2次ヒマラヤン・ブームの到来では、7,000m峰の初登頂も相次いだ。

1970年、大阪大学隊（水野祥太郎）がP29（ガディ・チュリ）、関西登高会隊（野村哲也）がダウラギリⅥ峰、静岡大学隊（芹沢喬）がチューレン・ヒマールにそれぞれ初登頂し、同志社大学隊（太田徳風）はダウラギリⅠ峰の秋季初登頂を果たす。

75年、大阪府岳連隊（野村哲也）がダウラギリⅣ峰、岡山大学隊（榎木栄一）がダウラギリⅤ峰。77年、登歩渓流会隊（加藤春雄）がヌプツェ北西峰。78年、雪と岩の会隊（尾形好雄）がヒマルチュリ西峰、日本勤労者山岳連盟隊（吉尾弘）がガネッシュ・ヒマールⅣ峰（パビール）、大阪市立大学隊（伴朗）がランタン・リルンにそれぞれ初登頂。

以後、79年、岡山大学隊（大森武生）がガネッシュ・ヒマールⅡ峰。81年、HAJ隊（植松秀之）がランタン・リ。83年、弘前大学隊（黒滝淳二）がネムジュン。84年、JAC東海支部隊（湯浅道男）がガウリサンカール南峰。92年、北海道大学隊（丹羽由紀夫）がヒムルン・ヒマール。94年、信州大学隊（藤松太一）がギャジカン。96年、信州大学隊（渡部光則）がラトナ・チュリなどの初登頂が相次いだ。

なお、中国、インド、パキスタン、ブータンの初

登頂は別項に記し、6,000m峰の初登頂は、割愛した。

一方、7,000m峰の主な初登攀は、以下に記す。

75年、明治大学隊（中島信一）がチューレン・ヒマール西稜。78年、名古屋山岳会隊（小川義夫）がダウラギリⅡ峰東稜、明治大学隊（河野照行）がアンナプルナ・ダクシン南西稜。80年、フリースタイル・クライミング・クラブ隊（大塚岩生）がランタン・リルン南東稜。81年、九州歯科大学隊（金沢健）がガネッシュ・ヒマールⅡ峰北東稜、福岡グレッシャー・クライマーズ・クラブ隊（白石宣夫）がニルギリ北峰北稜。86年、酪農学園大学隊（新谷暁生）がチャムラン西稜、日本大学隊（岡田貞夫）がヒマルチュリ南稜などの初登攀が成された。

一方、この時代には女性だけの登山隊がヒマラヤに挑むようになる。

70年、女子登攀クラブ隊（宮崎英子）のアンナプルナⅢ峰を皮切りに74年、日本女子隊（黒石恒）がマナスル。75年、女子登攀クラブ隊（宮崎英子）がエベレスト。76年、日印女子隊（M.アグラワール、須田紀子）がアビ・ガミンにそれぞれ女性初登頂を果たす。

以下に登頂した主な女性登山隊を記す。

80年、群馬女子登山隊（安中秀子）がバギラティⅡ峰。81年、女子登攀クラブ隊（田部井淳子）がシシャパンマ、アルパインクラブたんぽぽ隊（平川宏子）がCB13a（パルドール・ピーク）。82年、富岡女子隊（大岡ひろ子）がピサン・ピーク。83年、ブッシュ山の会隊（山本久子）がツクチェ・ピーク、富士宮山岳会隊（工藤紀代）がCB13a。85年、桐生山岳会隊（森下緑）がメントーサ、日本女子隊（倉松由子）がハヌマン・ティバ、HAJ隊（森美枝子）がムーシュ・ムスターグ。87年、HAJ隊（木下祥子）がヌン。88年、JAC隊（田部井淳子）がシヴァ、女子登攀クラブ隊（橋本しをり）がガッシャーブルム

Ⅱ峰に日本人女性初登頂。89年、田部井隊（田部井淳子）がメラ・ピーク。90年、女子登攀クラブ隊（安原真百合）がダウラギリⅠ峰。92年、HAJ隊（寺沢玲子）がサラスワティ、JAC隊（宮沢美渚子）がクワンデ。97年、HAJ隊（市川春代）と恩田真砂美・大久保由美子ペアがムスターグ・アタに登頂。

冬期登山

1980年代になるとヒマラヤの冬期登山時代が到来する。73年にノシャックの冬期登頂を果たしたポーランド隊（A.ザヴァダ）は、80年2月、エベレストの冬期初登頂を成す。

日本隊も80年12月、明治大学隊（植村直己）がエベレストに挑むもサウス・コルで涙を飲む。82年には北海道大学隊（安間荘）が11月中旬にBC予定地の北東コルに荷上げを開始し、12月13日にダウラギリⅠ峰に登頂。同年12月にはイエティ同人隊の加藤保男は、エベレストに単独登頂を果たすが、帰途遭難する。同時期、HAJ隊（山田昇）は、マナスルに挑んだが強風に阻まれて断念。

83年12月にはカモシカ同人隊（高橋和之）が、秋にローツェで事前登山を行った後、12月からエベレストに向かい山田昇ら3名とシェルパ1名が冬期登頂を果たす。同時期にネパール側と同時登頂を目指してチョモランマ北壁に挑んだカモシカ同人隊（今井通子）は、8,100mで断念した。

84年12月、群馬県山岳連盟隊（八木原罔明）がアンナプルナⅠ峰南壁に向かったが、悪天候に阻まれて断念。

85年12月には山田昇、斎藤安平のペアがマナスルに冬期登頂。同ペアは86年12月にマカルー南東稜に挑むも7,500mで断念。

87年12月、群馬県山岳連盟隊（八木原罔明）が、アンナプルナⅠ峰南壁の冬期初登攀を成す。同隊は、

引き続き91年冬、93年冬にエベレスト南西壁に挑み、93年12月に冬期初登攀に成功する。

93年に冬期エベレスト南西壁を登った田辺治は、其の後、冬期ローツェ南壁に執念を燃やし、01年、03年、06年と立て続けに挑戦し、06年についに冬期南壁を完登し、8,475mに到達。田辺は4年後ダウラギリⅠ峰登山中に雪崩で逝く。

カラコルム・ラッシュ

1971年、バングラディシュの独立に伴う第3次印パ戦争の勃発によってパキスタン政府は自国の登山禁止を発表する。73年秋に再解禁されるがシアチェン氷河周辺は解禁されなかった。75年にシアチェン氷河周辺の山々が解禁されると登山隊が殺到し、日本隊の初登頂が相次いだ。

先ず、日本隊の8,000m峰挑戦は、77年、日本山岳協会隊（新貝勲）がK2。同年、愛知学院大学隊（湯浅道男）がブロード・ピーク。80年、ベルニナ山岳会隊（佐藤英雄）がガッシャーブルムⅡ峰。81年、長野県山岳協会隊（前沢昌弘）がガッシャーブルムⅠ峰。83年、富山県山岳連盟隊（木戸繁良）がナンガ・パルバットにそれぞれ日本人初登頂を果たす。

一方、7,000m峰の初登頂は、下記の通り相次ぎ日本隊の独壇場となった。

75年、広島山の会隊（圓田慶爾）がカンピレ・ディオール、JAC岩手支部隊（笠原潤二郎）がマルビティン中央峰、市川山岳会隊（山本良彦）がK12に登頂して、74年京都大学隊（岩坪五郎）の初登頂に疑義を呈した。静岡大学隊（片山一）がテラム・カンリⅠ峰・Ⅱ峰にそれぞれ初登頂。

76年、大阪大学隊（三澤日出夫）がアプサラサス、東北大学隊（佐藤春夫）がシンギ・カンリ、神戸大学隊（平井一正）がシェルピ・カンリ、学習院大学隊（三井源蔵）がスキャン・カンリにそれぞれ初登頂。

3. 海外登山記録

78年、防衛大学隊（安藤千年）がパスー東峰、HAJ隊（西郡光昭）がバトゥーラIV峰にそれぞれ初登頂。

79年、北海道大学隊（越前谷幸平）がクンヤン・チュッシュ北峰、北海道山岳連盟隊（佐々木孝雄）がプマリ・チュッシュ、ラトックI峰（岩壁登山で既述）、弘前大学隊（花田澄人）がテラム・カンリIII峰にそれぞれ初登頂。

80年、東京志岳会隊（杉本忠男）がユトマル・サール。82年、金沢大学隊（東保幸）がハチンダール・キッシュ。84年、広島山岳会隊（大前恒雄）がウルタルI峰。85年、東京志岳会隊（杉本忠男）がマラングッティ・サール。96年、山崎彰人・松岡清司ペアがウルタルII峰にそれぞれ初登頂を成す。

一方、7,000m峰の初登攀では、下記のような記録が印された。

78年に昭和山岳会隊（島方健次）がハラモシュ西稜。79年、早稲田大学隊（大谷映芳）がラカポシ北稜。81年、千葉工業大学隊（藤井正善）がカンジュット・サール西壁。85年、関西カラコルム隊（賀集信）がマッシャーブルム北稜。91年、早稲田大学隊（大貫敏史）がトリヴォール北東稜などの初登攀が成された。

インド・ラッシュ

インドは第2次大戦後、国境の内側にインナーラインを設け、外国人の立ち入りを規制してきた。1974年にインナーラインが大幅に後退され、入域範囲が広がった。さらに79年秋にガンゴトリ地域がオープンされると、翌80年には22隊もの日本隊がインド・ヒマラヤを訪れた。中でもオープンされたガンゴトリには、半数の11隊が訪れ、シヴリン北稜～北壁の初登攀（岩壁登山で既述）。東洋大学隊（大滝憲司郎）がメルー南峰、飛騨山岳会隊（島田靖）がメルー

北峰にそれぞれ初登頂。立命大学隊（中江啓介）がヴァスキ・パルバット東壁から初登頂。登嶺会隊（宮原末夫）がカルチャクンド、香川県労山隊（高林久蔵）がバギラティI峰にそれぞれ初登頂を成す。

この時代の6,000m峰の主な初登頂は、以下の通り。

75年、上市峰窓会隊（田辺郁夫）がカランカ、HAJ隊（清水澄）がリシパハール。76年、東洋大学隊（大滝憲司郎）がドダ。77年、広島山岳会隊（久保信義）がバルナジII中央峰。78年、明治大学駿台山岳部隊（坂本武）がバイハリ・ジョット南峰。79年、秋田クライマーズクラブ隊（平沢健治）がデヴィ・ムクット。80年、群馬県高校職員隊（村上泰賢）がシャルミリ（CB53）、北海道大学WV隊（大内論文）がザンスカールのZ1。82年、ラッツ隊（伊藤忠雄）がCB14、京都大学隊（宗森行生）がCB31。95年、足利工業大学隊（沖允人）がサラ・シュワ。97年、JAC東海支部隊（鈴木常夫）がクーラなどに初登頂する。

7,000m峰では83年、山学同志会の宮求、久松宏人と東洋大学の鈴木章は、アルパイン・スタイルでサトパント西峰を南面から初登頂。95年、山形海外交流協会隊（植松秀之）がマナ・ピーク北西峰に初登頂する。

一方、7,000m峰の初登攀では76年、JAC学生部隊（牧野内昭武）がドゥナギリ北稜。78年、明治学院大学隊（小堀一政）がヌン東稜。80年、名古屋大学隊（伊藤行人）がヌン北西稜の初登攀などがある。

83年、IMFはナンダ・デビ内院の立ち入り禁止を発表し、周辺の登山が適わなくなる。

第3次印パ戦争の後、パキスタン政府は75年からシアチェン氷河周辺の山々への入域を許可した。それによって7,000m峰の初登頂は前述したように何れもパキスタン側からビラフォンド・ラを越えてシアチェン氷河に至り、登頂したものであった。ところ

が80年代に入ると印パの対応に変化が表れる。80年にインド陸軍隊（K.N.タダニ准将）がヌブラ谷からシアチェン氷河に入り、アプサラサスⅠ峰に登頂。翌81年にはN.クマール大佐の率いるインド陸軍隊がシア・カンリとサルトロ・カンリに登頂する。

こうした背景の中、84年にIMFは、東部カラコルムのマモストン・カンリの登山許可をHAJの日印合同隊（B.S.サンドゥ、尾形好雄）に与え、初登頂を成す。一方、同時期にパキスタンからリモⅠ峰の登山許可を受けた弘前大学隊（飯岡博）は、イスラマバード入りした後、山の変更を求められ、ユクシン・ガルダン・サールへ転進を余儀なくされた。

その後、IMFは85年から東部カラコルムへの登山隊受け入れを開始。85年にはHAJの日印合同隊（フカム・シン、沖允人）がサセル・カンリⅡ峰西峰に初登頂。88年、HAJの日印合同隊（フカム・シン、尾形好雄）がリモⅠ峰に初登頂。93年、広島山岳会の日印合同隊（フカム・シン、名越實）がアク・タシに初登頂。今世紀に入ってから、02年にJACの日印合同隊（H.カパディア、坂井広志）がパドマナブに初登頂している。

中国ヒマラヤのオープン

中国では文化大革命の後、再復権した鄧小平が、「対外開放政策」を打ち出し、それに伴い1979年から中国領ヒマラヤが開放された。

まず、日本隊の中国領8,000m峰への初挑戦は以下のように続いた。

80年、JAC隊（渡辺兵力）がチョモランマの北壁（下部初登攀）と北東稜から登頂。81年、シシャパンマ登頂（女性隊で既述）。82年、90年、チョゴリ登頂（ヒマラヤ鉄の時代で既述）、87年、カモシカ同人隊（高橋和之）がチョー・オユーに登頂。89年、宮城県岳連隊（八嶋寛）がガッシャーブルムⅠ峰に挑

戦。

次いで未開放だった山域での初登頂を目指す登山隊が殺到して、熾烈な登山許可争いも展開された。

7,000m峰の初登頂では、81年、川崎市教員隊（坂原忠清）がムスターグ・アタ北峰。82年、大分県岳連隊（伊東亨）がポーロン・リ、京都大学隊（上尾庄一郎）がカンペンチン。85年、京大・同志社大合同隊（平林克敏）がナムナニ。86年、神戸大学隊（岡市敏治）がクーラ・カンリⅠ峰、東北大学隊（金森安孝）がニエンチェンタンラ、東京農業大学隊（早坂敬一郎）が7,167m峰（崑崙）、HAJ隊（八嶋寛）がチョー・アウイ、HAJ隊（新郷信廣）がカルジャン北峰、HAJ隊（飛田和夫）がギャラペリ。87年、HAJ隊（山森欣一）がラプチェ・カン。88年、同志社大学隊（内藤真一）がカント。89年、大阪市立大学隊（佐藤一良）がスークァン・リ。92年、JAC隊（重廣恒夫）がナムチャ・バルワ。93年、JAC東海支部隊（徳島和男）がクラウン。94年、岐阜大学隊（藤井洋）がチリン。95年、中津川勤労者山岳連盟隊（宮下征夫）がニエンチェンタンラ東峰。97年、日本勤労者山岳連盟隊（近藤和美）がリスム。99年、JAC隊（伊丹紹泰）がリャンカン・カンリなどの初登頂が成された。

ブータン、シッキムのオープン

1982年、国際山岳連盟（UIAA）の総会がカトマンズで開催された。その際、ブータン政府代表団から83年からブータン・ヒマラヤをオープンすることがアナウンスされた。それを受けて早速、日本隊は動いた。

83年、解禁第1号の許可を取得した女子登攀クラブ隊（田部井淳子）は、ジチュ・ダケに挑むも断念し、セプチュカンに転進して初登頂。

84年、HAJ隊（八木原罔明）はジチュ・ダケ東稜

3. 海外登山記録

を初登攀し、南峰に初登頂したが、北峰は断念した。同年、東京北部勤労者山岳連盟隊（小宮昌平）はツォリム・カンに初登頂。川崎橘山想会隊（菅原長久）はガンブーに初登頂する。

85年、HAJ隊（大内論文）がガンケルプンスムに南稜から挑むも6,800mで断念。同年、京都大学隊（堀了平）はマサ・カン、千葉大学隊（吉永英明）がナムシラにそれぞれ初登頂した。86年、川崎市教員隊（坂原忠清）はマンデ・カンに初登頂する。

87年にブータン政府は、ガンケルプンスムの登山禁止を発表。以後、日本隊のブータンでの登山は暫く途絶えるが、91年、千葉大学隊（桜井文隆）がツェンダ・カンに初登頂する。

75年にインドの22番目の州に併合されたシッキムは、インナーラインの問題で北部シッキムへの外国人入域が閉ざされてきた。

91年、HAJの日印合同隊（フカム・シン、尾形好雄）が外国隊としては戦後初めてシッキムのゼム氷河に入り、カンチェンジュンガ北東支稜から登頂した。これを契機に翌年からシッキムの門戸が開放され、日本隊が押し寄せた。

92年、東洋大学隊（大滝憲司郎）はチョンブーに挑むも断念。93年、HAJの日印合同隊（ハルバジン・シン、尾形好雄）がピラミッド・ピーク（パティバラ）に初登頂。同年秋、明治学院大学隊（伊丹紹泰）はトゥインズ（ジンミゲラ）に挑むも事故のため断念。94年、大滝憲司郎が率いる日本隊は、トゥインズに初登頂するが登頂者は遭難。同年、東北大学長峻山の会隊（能勢真人）は、シニオルチューの偵察でゼム氷河に入り、翌95年にシニオルチューに登頂する。

公募登山隊

1980年代に入るとそれまでには無かったコマーシャ

ル・エクスペディション（商業登山）と云われるガイド公募登山隊が現れる。

80年春、スイスのマックス・アイゼリンが自身のダウラギリ I 峰初登頂20周年を記念して一般公募した隊員17名をダウラギリ I 峰に送り、17名が登頂。同年秋には、ドイツのハウザー・エクスペディションが公募隊11名をアンナプルナ I 峰に送り、中央峰に11名が初登頂。同隊は翌81年春にはマナスルに公募隊28名送り、13名を登頂させた。

ネパールで始まった「ガイド公募登山」は、パキスタンや中国の8,000m峰へも拡がっていった。

やがてこの「ガイド公募登山」は、世界最高峰のエベレストでも行われるようになる。90年代に入るとニュージーランドのロブ・ホールを初めとする欧米からの公募登山隊が陸続とエベレスト登山に押しかけるようになる。96年にはロブ・ホール隊に参加した難波康子が、日本人女性二人目のエベレスト登頂者（766番目）になった後、下山時に遭難。公募登山隊のあり方に警鐘をならしたが、2000年代になると公募登山隊は、益々盛況となった。

エベレスト初登頂から40年後の93年12月に筆者が登頂した時が613番目であった。それが2014年になるとエベレスト登頂者は延べ7,000人を超えた。

終わりに

1970年～1999年にヒマラヤへ出かけた日本隊は1,470隊、10,656人（山森欣一調べ）に及ぶ。この30年間は日本のヒマラヤ登山の最盛期で、さまざまなヒマラヤ登山が展開された。それらを限られた紙面で述べることは大変困難なことで、本来なら各キャプション別に執筆したいところであった。文中の各ピークに標高も記載すべきであったが、文字数を減らすために割愛した。人名の敬称も省略させていだいた。

【参考文献】

岩と雪Vol.30、36、38、43、46、52、山と溪谷社
岩と雪・山岳年鑑（1975～1995年）、山と溪谷社
山森欣一（2018）日本ヒマラヤ登山通史、日本ヒマ
ラヤ協会
山森欣一（2012）日本のヒマラヤニストたち、日本
ヒマラヤ協会
池田常道（2015）現代ヒマラヤ登攀史、山と溪谷社
Richard Sale & John Cleare（2000）ON TOP
OF THE WORLD, Haper Colins Publishers
Ltd.